アメリカ・ユダヤ系文学における初期ユダヤ人像

——Identity の変容をめぐって——

稲 田 武 彦

は じ め に

第二次世界大戦直後の1948年に戦争小説の形ではあるが、Norman Mailer (1923〜) の *The Naked and the Dead* および Irwin Shaw (1913〜) の *The Young Lion* などを皮きりとして、50年代には Saul Bellow (1915〜) が饒舌体を駆使した現代アメリカのピカレスク大作 *The Adventures of Augie March* (1953) で、Bernard Malamud (1914〜) は市井のペイソスを独特なタッチで描いた短篇集 *The Magic Barrel* (1958) によって、それぞれ National Book Award (全米図書賞) を受賞し、さらに、処女作ながら痛烈な諷刺を利かせた中・短篇集 *Goodbye, Columbus* (1959) の新進 Philip Roth (1933〜) 等がこれに続くというように、"lost generation" のあとをうけて60年代以降現在にいたるまで、数多くの意欲作、話題作を提供しながら、ユダヤ系アメリカ作家は現代アメリカ文学を担う大きな存在となっている。

かつてはその特異な社会的存在ゆえに、とりわけ非ユダヤ人作家の作品において、世間の偏見をそのまま投影した stereotyped image (紋切り型) として描かれることの多かったユダヤ人であるが、戦前のユダヤ系作家自身の手になるユダヤ人像も、内部のさまざまな葛藤を通しつつなおかつ一定のパターン——社会のなかのユダヤ人 (意識) ——を免れなかった。それが今日 Bellow のノーベル文学賞受賞 (1976) にもうかがえるように、アメリカ文学の主流にとどまらず、世界の文学の一環として認められるにいたったのはなぜか? その答えはいろいろあろうが (本稿の目的もその歴史的端緒を探るところにある)、各作家の資質、技量もさることながら、その作品世界形成に陰に陽にかかわったユダヤ的状況、より具体的にいえば、アメリカ社会におけるユダヤ移民の事情の推移とその及ぼした作用、それに伴う文化遺産、宗教伝統、慣習、意識、心情の時空両面でのひろがりゆく perspective がもたらした作者の

立場への影響（これは題材処理上の自由さと多様性を生む）、さらには、第一次大戦を契機に本格的産業化が進み、資本主義体制内での New Deal の変革期を経て定着をみたアメリカの大衆社会での人間疎外状況と、中間・下層階級中心の都市化の傾向（これはいまや世界的なものともいえる）が、元来疎外された存在であり、かつアメリカでは都市生活者でもあるユダヤ人の状況とオーバーラップし、ユダヤ的なものの普遍化ないしは拡散化[1]が起こることによって、ユダヤ系作家の文学上の主題が現代的普遍性を帯びるにいたったとも考えられる。

だが、その他の要因も含め、いずれにせよこれらの理由をすべてのユダヤ系作家・作品にあてはめることは、それこそあまりにも図式的になるおそれがあろう。同じユダヤ系といえども、さまざまなニュアンス、傾向を呈しているのであって、そこにまた彼らが現代アメリカ文学に賦与する活力と多様性が存する。たとえば、ユダヤ系出身ではあっても、そのことだけでなく世俗的にもかけはなれたところで、一種の普遍的純粋さの追求という独自の世界を構築する J.D. Salinger（1919〜）のような場合もあれば、一方これと対蹠的ながら、Mailer にしても、アメリカ現代社会にたいする強烈な関心から、政治、性、愛、神、実存などを挺子に現代文明を縦横に裁断、論評、諷刺し、パロディ化して倦むところなく、ユダヤ的素材ないし媒体は顕在化していないといっていい。逆に好んで Jewish scene を俎上にしてメスを振う Roth だが、そこには現代生活の歪みが鋭くえぐられてもいるし、また、都会の片隅の Jewish life に magic imagination の光をあてる Malamud も、われわれに人間としての善にたいする確信を与えてくれる。さらに Bellow は、根強い Jewish background を感じさせても、広く深い思索的洞察を交えて現代における生の探究をおこなう……まことに多彩な対応の仕方だが、いずれも現代の社会、生活における人間の問題に迫っている。この点こそ彼らの文学が、過去の狭いユダヤ系文学の枠を超えて現代文学の性格をもつにいたった所以であろう。

いまこの展開をユダヤ人像の変貌を通して辿るにあたり、時期の扱いをどうするかだが、実質的には1880年代を起点にとるのが普通である。それは、今日アメリカのユダヤ人口の90%〜95%が、1880's 以降の東欧系大量移民およびその子孫と推定され、アメリカ文学への寄与も彼らによるとされるからだ（ちなみに Malamud, Bellow, Mailer はともにロシア系ユダヤ人の家系の出である）。1920年代初期までの大量移民期に胚胎され発芽したものが、両大戦間に成長し、第二次大戦後花開いたといえるわけで、本稿でも1880年代以降に重点を置くことになるが、それ以前の植民地時代を含めた時期も概観し、初期のユダヤ人像の推移もあわせて視野にとどめておきたい。ま

た考察の材料はアメリカのユダヤ系文学、それも小説を中心とするが、必要に応じて他のジャンルや、外側からの照射として非ユダヤ系の作品、態度にふれる場合もある。なお、アメリカのユダヤ系文学との関連でいえば、イディッシュ文学（Yiddish literature）の存在を見落とすわけにいかず、これも時に応じて（英訳の紹介を通してだが）最少限の言及は心がけたい。また、ユダヤ人がとりわけ歴史的、社会的存在であったため、背景として（本文中Aの部分[2]）この点の説明を移民の事情とともにある程度入れざるをえない。それから副題の“Identity”（自己の本性）については、特異な宗教、文化、生活習慣をもった minority group が異種の社会のなかで直面する assimilation（同化）ないし acculturation（文化変容）の問題としてみた場合、当然のテーマと思われるので、“Image”にたいする対の意味もこめて用いた。なお、本稿はほぼ第一次大戦までを扱っており、それ以降については次の機会を期すこととし、表題に“初期”（Early）を冠しておいた。

註 1) 文明論的命題としては、たとえば、大木英夫著『現代人のユダヤ人化』（白水社、1976）などに示唆されていることともかかわってこよう。

2) この部分については主として次の二著によった。
マックス・ディモント：『ユダヤ人―神と歴史のはざまで―』（朝日新聞社、1977）
ジェイムズ・ヤフェ：『アメリカのユダヤ人―二重人格者の集団』（日本経済新聞社、1972）

I　植民地時代から大量移民期まで（1654～1880）

A

よく象徴的な事柄として取りあげられるが、コロンブスのアメリカ大陸発見の年（1492）とスペインおよびポルトガルのユダヤ人の追放のそれとが重なり、アメリカのユダヤ史が始まったとされることである。地図作成など航海の準備や、航海そのものへの参加でユダヤ人が貢献したのは事実としても、これはあくまで象徴的一致にとどまり、アメリカ（合衆国）への移住としては、追放されたユダヤ人の逃げ場であった南アメリカでの異端審問所（Inquisition）の追い討ちと、当時の列強間の争いに巻き込まれた結果、ブラジルからニューアムステルダム（のちのニューヨーク）へ23人の Sephardic Jews（中核はスペイン語、ポルトガル語系のユダヤ人）が上陸した（1654）のが最初とされている。（ただ、すでに1621年にはヴァージニアにユダヤ人の開拓地ができていたそうだが、後年のユダヤ人活動の中心地としてのマンハッタンに鑑み、上述の移住を起点と考えてよいだろう。）

やがてアメリカ植民地がイギリスの統治下に入り（1664）、次いで独立（1776）を迎

える頃には、ユダヤ人は13州全部に住んでいたものの（主な中心地はニューヨーク、ニューポート、サヴァンナ、チャールストン、フィラデルフィア)、その数は3,000弱に過ぎなかった。大部分は Sephardic で、その他ドイツ系を主にポーランドおよび東欧地域からの者（これらは Ashkenazic Jews といわれる）が少数混っており、彼らは経済的収奪、宗教的偏見、政治的圧迫という他の植民者の場合と似た理由で移住してきたものである。そして後の大量移民の時と異なり、共同体全体の移住でなく個人や家族単位であり、母国語を棄て名前もアメリカ化され、宗教面でも改宗を勧められ、intermarriage（異種族間相互の結婚）を通して Judaism（ユダヤ教もしくはユダヤ主義）から離れていき、アメリカの社会体制に呑み込まれてしまった（ニューポートでのように同化消滅の例もある)。その理由は、一つは植民者自身が中産階級をなす "the masterless America" (D.H. Lawrence の用語）の社会体制の性格であり（従って旧世界のゲットーにおけるようなユダヤ人の自治の考え方がない)、他の一つとして、清教徒精神の性格がある。元来旧約聖書の精神の継承者と自分たちを考えていた彼らには、ユダヤ主義的性格がそなわっており、彼らのヨーロッパ脱出はまさに "Exodus"（モーセによるイスラエルのエジプトからの脱出）そのものといえる。Biblical Jews（聖書にでてくるユダヤ人）を自らの手本とし、宗教生活の指導上の必要からハーヴァード大学ではヘブライ語が必須とされ、独立にあたっては古代ヘブライ人の政体の民主的要素が参考にされ、憲法にはモーセ法典から採用されているものが多いという結果にさえなったほどである。しかしながら、この時期のユダヤ人自身は、憲法制定に加わったわけでもなければ、また、学者や思想家にもならず、一部の裕福者を除き彼らは貿易商人や手職人として終ったのである。

18世紀に入って徐々に増加してきたドイツ系ユダヤ人は、1750年にはスペイン系を上まわり、1825年頃のユダヤ移民の第一波が終る段階でアメリカのユダヤ人口を約1万におしあげ、1840年代後半における彼らの本格的移住（第二波の移民でオーストリア、ハンガリー、ボヘミア、北イタリアからも含まれる）によって、東欧からの移民の始まる直前の1880年には25万（当時の全人口の約1％）のユダヤ人を数えるにいたった。この移民の動機は経済事情のほか、主として1848年以降ヨーロッパを吹き荒れた革命にたいする反動主義——anti-Semitism（反ユダヤ主義）の復活にもつながる——のためで、700万のキリスト教徒の避難民とともにやってきたものである。当時拡張の途上にあったアメリカは東部の工業、西部の農業でそれぞれ労働者、農民を必要とし、さらにそれに伴う商業活動の分野で人手を求めていた。ヨーロッパでの伝統に従い、ユダヤ人は商業でも空白のあった小売部門に入り、多くは itinerant peddler

（行商人）として全国に散っていったが、後にこのなかから百貨店経営などによって財をなし、社会事業と文化事業へ貢献する者がでることになる（グッゲンハイム、モーゲンソー、レーマン、シュトラウス家など)。さらに一部は、弁護士や医者のような専門職につき、社会的地位の向上とともにアメリカ社会への同化を深めていった。もともと母国で、自分たちをドイツ人に近いと考えていたほど同化傾向の強かった彼らは、宗教生活の面でも、ドイツにおける改革運動をアメリカにも持ち込み、Isaac Mayer Wise (1819～1900）の指導の下で Reform Judaism（改革派といい、食餌法、安息日の規則、礼拝形式などを近代化、自由化したもの）を押し進め Americanization をはかった。

これら第一波、第二波の移民期を通じて特徴的なことは、先にもみたように、その数の少なさのため緊密なユダヤ共同体がつくれなかったことや、彼ら自身の志向そのもののせいなどで同化が進行した点と、もう一つは文化的に不毛であったことである。後者については、当時のアメリカ自体がヨーロッパにたいし、思想的には反知性主義、文学・美術では模倣者、科学では技術者であったといわれるように、ユダヤ移民文化も反知性主義的かつプラグマティックであり、これは1880年代以降の文化的に肥沃な移民と著しい対照をなし、文学活動の土壌としてもこの背景の相違は重要である。

B

i）上記の背景からもわかるように、この時期のユダヤ系文学には全般的にみるべきもの少なく、とくに建国期まではこれといった文学創作者はもとより、文学的題材としてもユダヤ人が認められることはなかった。むしろ非ユダヤ人の清教徒たちによる theological prototype（神学的原型）としての Biblical Jewish image がクローズアップされ、これは19世紀に入ってニューイングランドの非ユダヤ系詩人たちの好んで取りあげるところとなった。たとえば、H.W. Longfellow, J.G. Whittier, O.W. Holmes などは Biblical Jews への憧れを謳い、あるいはユダヤ伝説や物語を題材とした。しかし、これらは結局 Christian sentiment にもとづくものであって、古代ユダヤ人像とはほど遠い生身のユダヤ移民にかかわりをもつものではなかった。

ii）これにたいし同じ19世紀になって、その成果はともかく、ようやくユダヤ人自身の文学創造がみられるようになった。主に劇作の分野であって次の四人があげられる。まずニューヨーク市政にたずさわった政治家で、外交官、各種新聞の編集者でもあった Mordecai Manuel Noah (1785～1851）は、Zionism（ユダヤ民族主義）の先駆者としても名をとどめる一方、時局に材を得た劇をいくつか書いており、好評を博

したものもあるが、ユダヤ人を登場させたり、ユダヤのテーマを扱ったものは一つもなかった。これは彼が外交官時代味わったユダヤ人としての不快な思いからきたもので、ユダヤ意識がありながら（あるいはそのために）、当時の観客の好みであったShylock風の人物を提示したくなかったのである。同様に作中Jewish characterを出さなかった、植民地時代からのユダヤ商人の家系出身であるJonas B. Phillips（1805～1869）は、Shakespeareの*Coriolanus*に触発された悲劇を書き、後に法曹界に入っている。また、若年からエッセイスト、文芸批評家、劇作家として名をなし、生地チャールストンでJudaismの改革運動に先鞭をつけたIsaac Harby（1788～1828）も、作中ではユダヤ的題材を扱わなかったが、劇評でShylockの描き方に思い切った反論を浴びせている。四人のうちただ一人ユダヤのテーマを取りあげたのはSamuel B.H. Judah（1799～1876？）だが、彼は匿名ないし変名を用い、ユダヤ人グループに非好意的であった。

他方非ユダヤ系の作家は比較的にJewish sceneやsituationにふれること多く、Emersonなどイタリアのghettoの惨状に心を痛め、あるいはユダヤ人の権利のためこれを擁護する者もいた。各種の定期刊行物や新聞でも、論評でユダヤ人の市民としての立派さを讃える場合もみられるようになった。依然としてヨーロッパでのstereotypeを追い、中世期の醜悪なユダヤ人像を挿入したベストセラー小説もあらわれたが、当時のユダヤ行商人の人となりに直接ふれたドイツからの非ユダヤ系移民Otto Ruppiusの自伝的小説*The Peddler*（1857）では、誠実で善意にあふれたユダヤ人が描かれている。そのユダヤ行商人の辛苦についていえば、彼ら自身の残した日記から、故郷をあとにして夢と現実のはざまに立たされた心情が次の引用からもうかがえよう。

"Though oppressed by taxes and discriminated against as a Jew (in Germany), I should still be happier than in the great capital of America, free from royal taxes and every man's religions equal....There is woe——threefold woe——in this fortune which appears so glamorous to those in Europe. Dreaming of such a fortune leads a man to depart from his home. But when he awakens from his dreams, he finds himself in the cold and icy night, treading his lonely way in America."[1]

さらに、これも文学作品というわけではないが、自らユダヤ移民として1846年に渡米し、指導的ラビ（rabbi；ユダヤ教の律法学者）の立場から、ユダヤ系アメリカ人の全国組織を通じて伝統的Judaismの改革をおこなったI. M. Wise（前出）の*memoirs*（1874）（英訳出版は1901年）には、期待に反したニューヨークの印象や、移民同士の醜い争い、ユダヤ人のキリスト教徒への追従など、移民の実態をまのあたりにした彼

の内側からの卒直な感想と決意がみてとれる。以下はその後の彼の志向を要約していると思われる。"The Jew must be Americanized, I said to myself, for every German book, every German word reminds him of the old disgrace. If he continues under German influences, as they are now in this country, he must become either a bigot or an atheist, a satellite or a tyrant. He will never be aroused to self-consciousness or to independent thought. The Jew must become an American, in order to gain the proud self-consciousness of the free-born man....We must be not only American citizens, but become Americans through and through, outside of the synagogue. This was my cry then and many years thereafter." (from *An American Judaism*[21])

ついでながら後に彼はユダヤ大衆紙、ドイツ語雑誌を創刊し、The Union American Hebrew Congregations (1873), The Hebrew Union College (1875), The Central Conference of American Rabbis (1889) などの諸組織をつくり、Reform Judaism の父と呼ばれた。

以上のように、ユダヤ人自身の手による劇、散文がぼつぼつ出始めたが、Jewish image の創造の点からは無に等しく、また非ユダヤ人の作品ではあくまでもアウトサイダーとしての取りあげ方であって、ユダヤ伝統に身を置き、移民自体の心にわけ入ってその感情や希求に適切な文学的表現を与えたものではなかった。それには20世紀をまたなければならないが、そこにいたるいわば萌芽として、三人の女流詩人の名を逸することはできない。

三人のうち最年長で、もっとも長生きした Penina Moise (1797～1880) はチャールストンに生まれ、12歳で父（アルザスからサン・ドミンゴを経てきた移民）をなくしてから学校を中退し、独学を重ねて塾で自活するかたわら詩作を続けた。後年視力を失うが、サロンをひらき土地の知的交流の中心となった。創作詩（これは平凡の域を出ないとされるが）のほか、Charleston Synagogue（ユダヤ教会堂）の会衆のために書いた Hymns と Psalms の翻訳があり、敬虔な信仰の裏づけによる神への感謝と諦念の境地がその詩の特徴的色合いとなっている。次にユダヤ信仰を最後まで捨てなかった点では Moise と同じだが、その烈しくめまぐるしい一生によって対照的な Adah Isaacs Menken (1835～1868) は、ニューオーリンズ近郊のユダヤ人家庭の生まれで、幼時に父をなくしたが再婚した母の配慮で相当の教育を受け、裕福なユダヤ系の音楽家と結婚する。1857年の不況で夫が産を失うと、本格的に演劇の舞台へ立ちやがて離婚、以後パリのリハーサルで倒れるまで俳優を続けた。この間、アメリカのボクサーでヘビー級チャンピオンやコラムニストなどと三度結婚、ニューヨーク、サ

ンフランシスコを転々としたあと渡欧し、M. Twain, B. Harte, A. Dumas, T. Gautier, Rossetti, Swinburne などの文士と近づきになった。彼女は詩才よりその人間的魅力が大きかったといわれるが、初期の詩はシンシナティで Wise の発刊した週刊紙「The Israelite」に約2年近く（1857～1859）載り、主としてユダヤ的事柄を扱い、旧故国への復帰のねがいがこめられたものだった。世界中の迫害されるユダヤ人へ強い同情の念を抱いた彼女は、一切の反ユダヤ主義を否定し、また Messiah（救世主）の到来を信じて自らをユダヤ民族の予言者に擬した。しかし彼女の死の直後、選詩集 *Infelicia* が出たが、そのうちユダヤに関する詩はわずか二つに過ぎず、全体としては彼女の世俗的成功とはうらはらの苦悩する魂をうたったものだった。Jewish poem の一つ *Hear, O Israel!* は予言者がイスラエルの民にエルサレムへの帰還を呼びかける四節の詩だが、これにはニューヨークで逢った W. Whitman の free verse の影響があるとされている。

三人のなかでもっとも才能があり影響力の強かったのは、自由の女神像の台座にその詩句が彫られていることで有名な Emma Lazarus (1849～1887) である。ニューヨークのポルトガル系ユダヤ人の家系の出で、若い頃から詩作を始め、ゆたかな砂糖商人の父と交友のあった Emerson に傾倒して自然への愛、人間の内面生活の探求に力をそそいだ（A. Guttmann によれば[3] 後年の作品にも Byron など他の詩人の影響があるという）。20代で詩のほかに小説、劇も書いたが、いずれもギリシア神話やドイツ伝説あるいはゲーテの恋、中世などに取材したもので、同化の進行する環境やとくに宗教的傾向の強いというわけではなかったためか、ユダヤ的テーマには関心が薄かった。が、やがて転機がくる。ロシアのポグロム（pogrom；非ユダヤ人によるユダヤ人の集団殺戮で、ロシアでは農民、ポーランドではコサックによるものが多かった）を逃れてきた避難民を目撃してショックを受け、すべてのユダヤ人が分かちもってきた歴史的運命に目覚める。才能だけでなく、この1880年代の東欧からの移民に遭遇できた点で、彼女は前二者よりユダヤ系文学にとって意義ある存在となりえたといってもよいだろう。この後、彼女は作詩によるだけでなく、言論や救済活動を通して同宗者の鼓舞にのり出していく。

Rosh-Hashanah Poem (1882) で彼女は、アメリカの自然と聖地パレスチナの神秘的結合のなかでの、ユダヤの栄光の再生を高らかにうたいあげた。中世ドイツにおけるユダヤ人迫害を扱った詩劇 *The Dance to Death* (1882) では、求婚者への愛と迫害される人々への献身の二者択一に立たされた女主人公が、後者を選ぶことで作者の志向をあらわしたものといえる。ロシアのポグロム容認の記事にたいしては、使命感

に燃えた熱意をもって反論し、貧相でもユダヤ主義に生きる移民への同胞意識を強調した。彼女はいまや予言者的立場に立ち、*The Banner of the Jew, The New Ezekiel* といったような polemical poems によって、同化の幻想に落ち込んでいる同時代のユダヤ人の覚醒を促し、あるいは過去の栄光に照らして、未来の国民的再生のための団結を訴えた。さらに、「The American Hebrew」に16回にわたって *An Epistle to the Hebrew* を連載し、ユダヤ人の生活の改革と深化について健筆をふるった。そのなかで彼女は、極端な宗教的硬化を排しながらも、ユダヤ人の特異さを保持して世界の規範となり得るよう自己鍛練に励み、きたるべき20世紀にそなえることを説き、またユダヤ人としての連帯感を深め、祖国建設のために働くことを呼びかけた。こうして彼女は Zionism の先駆的夢を唱え、ユダヤ人活動の二大中心地としてアメリカとパレスチナを思い描いたのだったが、すでにアメリカ社会に安定した地位を築いていたユダヤ人からは強い関心を引くにいたらず、流入しつつあった東欧系移民には、彼女の elegiac verse に共鳴するゆとりもなく、それを理解する言語的素地も不充分だった。（当初彼らの言語はイディッシュ語で、やがて彼らは彼ら自身のあいだから出た M. Antin と A. Cahan に自分たちの "literary spokesman" を見出すことになる。）ユダヤ遺産への目覚めと同胞移民への共感をもちながらも、彼女自身アメリカに定着した Sephardic Jew の一員であり、理想主義的であったことから、独特の宗教、文化を負い、生活の手段を求めてニューヨークにひしめく東欧系移民の代弁者となるには限界があった。しかし、ユダヤ人問題をめぐるその後の歴史的展開に徴してみる時、T. Herzl (1860～1904；オーストリアのユダヤ人作家で、シオニズム運動の代表的提唱者）同様彼女の先駆者的意義は否定できないであろう。彼女の代表的詩集は *The Songs of a Semite* とされており、ここには女神像の「台座の詩句」を含む *The New Colossus* と *The Banner of the* Jew の一部を引いておこう。

Not like the brazen giant of Greek fame,
With conquering limbs astride from land to land;
Here at our sea-washed, sunset gates shall stand
A mighty woman with a torch, whose flame
Is the imprisoned lightning, and her name
Mother of Exiles. From her beacon-hand
Glows world-wide welcome; her wild eyes command
The air-bridged harbor that twin cities frame.
"Keep, ancient lands, your storied pomp!" cries she

With silent lips.「"Give me your tired, your poor,
Your huddled masses yearning to breathe free,
The Wretched refuse of your teeming shore.
Send these, the homeless, tempest-tost to me,
I lift my lamp beside the golden door!"」

(*The New Colossus* [4])

Oh for Jerusalem's trumpet now,
  To blow a blast of shattering power,
To wake the sleepers high and low,
  And rouse them to the urgent hour!
No hand for vengeance——but to save,
A million naked swords should wave.

O deem not dead that martial fire,
  Say not the mystic flame is spent!
With Moses' law and David's lyre,
  Your ancient strength remains unbent.
Let but an Ezra rise anew
To lift the *Banner of the Jew!*

(from *The Banner of the Jew*[5])

結論的にいえばこの時期は、宗教、生活面での integration（統合）もしくは assimilation の進行するなかにあって、後期には Wise や Lazarus のように Jewish identity への意識に目覚め、それに沿った創作活動もみられたのだが、どちらかといえば、直截的な"主義の宣言"の面が強く、さまざまな牽引力を受けた陰影ある literary image を結ぶにはいたらなかったといえるだろう。

註 1) *The Jew in American Literature* by Sol Liptzin (Bloch Publishing Co. Inc., New York, 1966) p. 36. 引用中の（ ）内は筆者、なお原典は *A Jewish Peddler's Diary* (1842～1843) である。
2) *The Literature of American Jews* ed. by T.L. Gross (The Free Press, New York, 1973) pp. 10～11.
3) *The Jewish Writer in America* by A. Guttmann (Oxford Univ. Press, New York, 1971)
4) *The Literature of American Jews*（前出）, p. 32.
5) Ibid., p. 28.

II 東欧からの大量移民期（1880〜1920）

A

19世紀も80年代を迎える頃、いよいよその後のアメリカにおけるユダヤ人の各分野での活動の土壌となった移民の大波が、東・中欧を中心に押し寄せることとなった。まず“Mass” Immigration といわれるように、大きい特徴の一つである数的情況もまじえていえば、先陣はすでに70年代に差別法の強化されたルーマニア、ハンガリー、オーストリア領ガリチアなどからやってきており（約4万）、そして本格的に1881年以降は、相つぐ“scape goat”としてのポグロムと飢餓あるいは兵役を逃れてロシア、ポーランド、リトアニア、ルーマニアからの避難民がなだれ込んできた。この間、80年代から90年代にかけてユダヤ人口は倍加し、1910年には125万を数え、第一次大戦後一連の移民制限のひかれ始める前年（1920）には200万に達して（東欧ユダヤ人の三分の一といわれる）、ようやくその勢いはおさまったのである。（数量的な面だけからみれば、その後はナチの手から逃れ、あるいは生き残った第二次大戦前後の30万ほどの亡命者ないし移民の小波がみられるにとどまる。）

この大移動の社会的背景は、東ヨーロッパにおける封建体制の崩壊であり、より具体的には、たとえばロシアでのように、日露戦争の敗北と経済不況のなかでのツアーの反ユダヤ政策（ポグロムの誘発につながる）によるものだった。一方これを呑み込んだアメリカでは、南北戦争の終結と西部開拓（フロンティアは1890年までに消滅）のあとを受け、経済基盤の強化と社会構造の刷新に向かおうとしていた。この結果、都市の比重の高まりと工業の興隆がみられ、さまざまな組織を基とした政治、行政活動が活発化した。好運にも移民たち（非ユダヤ系も含め）は、まさにこの膨張によってできた空白を埋めるかのように吸収されていったのである。非ユダヤ系の農民や非熟練労働者が主として中西部の工場へ向かったのにたいし、ユダヤ人たちはサービス産業など専ら都市の諸機能を果たすべく、小売商人、職人、学者、専門職の前歴に従い、はじめはマンハッタンのロアー・イースト・サイド（Lower East Side）のような貧民街での苦闘を経て、アップ・タウンへの脱出をめざし着実に地位向上の努力を重ね、子弟の養育にも力を入れることによって、1920年代以降の発展の基礎を築いたのだった。（移民当時の生活の模様は現代作家の幼少時の回想風叙述や、仕立屋、食料品店主などを題材とした短篇にもうかがえる。）

以上のような社会的背景にも増して、その後の文学的成果にとって重要なのは、彼らが持ち込んできた文化的背景だろう。圧倒的な量的差異による構成比の激変だけで

なく、従来の西欧系ユダヤ移民と質的にも様相を異にすることになったのである。西欧では各国で曲りなりにもユダヤ人解放がすすみ、ゲットーの消滅とともに市民権を得た彼らは、主として都市生活を通じ acculturation を推進していった（これはアメリカのドイツ系ユダヤ人の場合にもいえる）。これにたいし、いわゆるロシア系を代表とする東欧のユダヤ人は、大都市でのゲットーを除き、大部分がシュテトル（shtetl；「囲い」の意）という村落共同体の狭い居住区に閉じ込められ、土地所有と一定の職業を禁じられた生活を送っていた（小商人、労務者、原始的職人が大多数)。しかし、彼らは孤絶し、たえざる外圧にさらされることによってかえってユダヤ的伝統に結束して離散（Diaspora；ギリシア語の「散り散りになる」から由来、ユダヤ人の特異な生き方を示す言葉）のなかを生き延びてきた。I. Deutscher によれば[1]「ユダヤ人の中のユダヤ人意識は主として反セミ的迫害の反映」ということになる。宗教的にも前者の改革派（Reform）にたいし、正統派（Orthodox）を中心とした（Hasidism という大衆の間にひろまった、メシアの救済思想による一種の神秘主義的信仰復興運動も根強かったが）伝統的要素の濃いものであり、言語にしても西欧系は各国でその国の言葉を用いるようになったのに、東欧では依然として中世に起源をもつヨーロッパのユダヤ人独特の民俗語 Yiddish（12世紀のライン地方でドイツ語とヘブライ文字の結合から生まれたもので、その後それなりの構文法をもつようになり、さらに東欧へ入ってからはスラブ語系の要素も加わった。一方古来のヘブライ語は学者ならびに祈禱の言語として残った）を話していた。文化面では、解放されたユダヤ人たちがキリスト教中心の西欧の価値観を受け入れ、政治、科学、芸術、人文科学の諸分野で創造的貢献をなしたのに対応して、東欧でも、ともすれば停滞しがちの閉鎖状況のなかにあって、ユダヤ・ルネッサンスとでもいうべき新人間主義がおこり、はじめは西欧におけるようにドイツのユダヤ啓蒙主義を触媒としながらも、ユダヤ的価値観を基底としたユダヤ文化を生んだ（これは Haskalah と呼ばれ、「目覚め」、あるいは「再生」を意味するヘブライ語からきている）。ハスカラーはヘブライ語やイディッシュ語と結びついて、ユダヤ人の魂に内面的価値を求める新しい人間主義的文学を生み（ヘブライ語は知識人向けで詩や論文に、イディッシュ語は大衆のための小説に用いられた）、ユダヤ教に結びついてユダヤ実存主義を、さらに政治と結びついてシオニズムを生み、いずれも後年の Judaism の展開に深い影響を与えることとなる。こうして19世紀末のポグロムという生死にかかわる迫害を受けた東欧系ユダヤ人は、知識人を含めた共同体の各階層がいわばこれらの全文化を担い、一体となって新世界へ逃亡したわけである。形の上からは着のみ着のままの避難民であったかもしれないが、根なし草

になったのではなく移植（transplant）されたのであり、H. Frederic が “The New Exodus” と命名したのにふさわしい、ユダヤ文化・知性の中心の移動であったのだ。以後ユダヤ人の知的生活はアメリカに根をおろし、その文学活動も最初はイディッシュ語を媒体としながら、徐々に現代文学としての開花に向けて養分を吸収していくことになる。

このような過去、背景をもって渡ってきた移民団だったが、彼らを待ち受けていたものはなんであったろうか？　なるほど彼らの大半が割り込んだロアー・イースト・サイドはせいぜい12平方マイルの区画の、貧困、雑踏、汚物、騒音、ねずみなどに満ちたスラムではあったが、やはりそこは出身地のシュテトルではなく、移植された土壌はアメリカという未知ではあっても約束された新天地（Promised Land）であった。彼らの反応は、まず同じユダヤ系移民の先輩であるドイツ系ユダヤ人の彼らにみせた対応のなかから出てくる。すでにアメリカ社会に同化し、経済的、社会的地位を築きつつあったドイツ系は、当初東欧系移民（Russian Jew または単に Russian と蔑称され、“カイク”—kike—というユダヤ人の軽蔑的呼称も前者がつくった）に烈しい拒絶反応を示した。貧しく粗野で、正統派の伝統による異なった習慣、イディッシュ語という奇妙な言語などをもつ彼らと自分たちが混同され、国内的には「セリグマン事件」（ユダヤ人銀行家のホテル宿泊拒否事件、1877年）、国際的には後年「ドレフュス事件」（1894）、等につながる反ユダヤ主義の風潮に拍車をかけるものと不安、恐怖を抱いたのである。事実ユダヤ系アメリカ人の使節団をロシアに送り、ユダヤ人を文明化して移民させないようにする提案が出されたり、あの I. Wise さえ移民割当法の通過を促進し、さらにこれら移民をニューヨークからパレスチナへ復帰させようという便宜的なシオニズムを唱えることまでした。しかし、これらがあまり効果なく、一般の新聞論調のキャンペーンや排斥への批難もあって、ドイツ系ユダヤ人たちは自らの体面維持と反面哀れみから出た献身的行為によって、各種の組織を通じ後輩移民たちの教育、生活援助にのり出し、海外への救済にも手をさしのべるようになった。これにたいし、東欧系は assimilated Jew への反撥を感じつつも、ドイツ系ユダヤ人の成功を羨望視し（ドイツ風改姓などにみられる）、自由な天地でのあらゆる機会をつかむため、英語の習得をはじめ自己訓練にはげみ、苛酷な生活条件をくぐり抜けていった。ロアー・イースト・サイドは希望の世界での出発点であったのだ。こうして20世紀に入ってアメリカ生まれの多い第二、第三世代の出現に伴ない、アメリカ社会体制への組み入れとそこでの活躍がみられるようになる。心理的確執のあったドイツ系の集団とも、後に反ユダヤ主義への対抗、ナチズムによる犠牲、イスラエル誕生、アメ

リカの教育体系、相互結婚などを媒介に統合が進み、ユダヤ系アメリカ人として一つの人種的グループを形成するにいたった。

東欧系移民の辿った経過を一言でいえば、これも Americanization の一例であろうが、いわばユダヤ伝統の体現ともいうべき正統ユダヤ主義を背負っていただけに、移民の心の磁場に働く引力、斥力によってもたらされる緊張が彼らの像の輪郭、形相、向きなどに微妙な作用を及ぼし始めたのであり、文学的課題もまさにこの点をめぐって展開することになる。ここでは、非ユダヤ系ながら、1898年から1902年にかけてロアー・イースト・サイドを取材し、*The Spirit of the Ghetto* (1902) や *Types from City Street* (1910) を書いた若いジャーナリスト Hutchins Hapgood の好意的でしかも鋭い観察をあげておこう。彼は移民世界に中世来の伝統と習慣（両親の世代）と、現代生活の先端をいく諸相と理念（子供の世代）の対立をみ、とくに後者には "the Orthodox Jewish", "the radiant American", "the Utopian socialist" のそれぞれ三つの要素が働いているのを認め、アメリカ的理想とヘブライ的伝統の精神で融合することに献身する移民青年たちに期待を寄せた。彼はのちに反ユダヤ主義をめぐって T. Dreiser と論争し、ユダヤ人とその周囲の相互理解のためにたたかった。彼のほか、当時まだ英語による充分な表現活動をもつにいたらなかった移民に代り、J.A. Riis, L. Steffens, N. Hapgood のような評論家、ジャーナリスト、あるいはハーヴァード大学長の C.W. Eliot などが移民の不屈の精神、活気ある想像力、米社会への貢献、民族としての優秀性等を称賛し、「セリグマン事件」には祖父がユダヤ系である B. Harte をはじめとしてユダヤ人弁護の論陣がはられた（実際の差別は陰に陽に20世紀に入ってもなお尾を引くが)。ともかく表面的には、大量移民によって、ユダヤ人に関して従来不問にされてきた想定に基づく伝説、無智、偏見は（主として西欧系ユダヤ人のイメージからくる), より明瞭で真実な Jewish reality の評価に席をゆずることになり、これは literary stereotype をも修正するのに役立った。こうして、移民たちはアメリカの諸相に変化を与えるとともに自らも変化を受け、American reality を一層豊かで興味あるものとしていったのである。

最後に Orthodox Judaism とそれをめぐる事柄に補足説明を加えておこう。元来 Judaism は、トーラ（Torah；旧約聖書巻頭のいわゆるモーセ五書）とタルムード（Talmud；ユダヤ律法・説話とその解釈を記した250万語の書）を基礎としていたが、永年のゲットー生活でタルムードは動脈硬化をきたし、西欧啓蒙主義に応じドイツで改革派を分立させる。主として東欧に存続することになった正統派は、前述のようにハシディズムを内包しながら国家に代る民族保持の機能を果たしてきた。しか

し、19世紀に入って、ハスカラーの人間主義の勃興により、神秘的救済思想に浸った反現実的ハシディズムはもとより、律法尊重主義にこり固まった正統派も批判にさらされることになる。これが移民によって、ドイツ系ユダヤ人の改革派とアメリカの現実に出合ってさらに衝撃を受け、厳格な Judaism の固守か、子供たちの離反かの危機に立つ。結局彼らは内部改革に着手し、改革派あるいは無神論への流失を防ぐため、学習の水準を高め、世俗的課目もとり入れ、合唱隊を使っての日常語による説教をおこなって西洋化をはかった。耐圧の特殊な生体機能をそなえている深海魚が、引きあげられるとかえってそのために破裂してグロテスクな死体をさらすように、その危険を未然に防いだわけである。もともと日常生活へのかかわりの要素と聖俗一致の強いといわれる Judaism だけに、異なった現実生活とぶつかる時、その identity 存続の問題に直面せざるを得ないところからこのような変容も起こってくるのだろう。結果的に現在では、613 の戒律の守り方の度合から、この（改革）正統派のほか、改革派とともに多数派をなす中間的保守派（Conservative；改革派の過度の修正に反対する)、おくれて第二次大戦後ブルックリンのウィリアムズバーグ地区に住みついた真正正統派の小会派（12,000人位）が併存している。一方このような宗教内の改革にもあきたらず、宗教そのものを離脱していく傾向も出てきた。すでにロシアにおいて無抵抗主義を棄て、地下運動に加わってツアーの暴政とたたかう場合に萌芽があったように、政治運動もしくは労働運動を契機に、アメリカにおいても主として移民二世の間に、協同精神の socialism かそれとも自由精神の anarchism かに走る動きがでてき、さらには民族主義的シオニズムも加わって、第一次大戦やロシア革命、大不況などの世界史的激動のなかで、ユダヤ系文学にもさまざまな陰影を落としていくことになる。なお、第一次大戦とともにハシディズムのみならず、ハスカラーもその近代的使命を終え衰退の道を辿った。

B

i）この移民期の前半（19世紀末まで）は、イディッシュ語という言語的制約によって（後述のようにそれによる文化活動はあったものの)、前章の E. Lazarus などの活躍を除いて、移民自らによる“英語での解説者”がまだあらわれず、ユダヤ人像は専ら非ユダヤ系作家の手にゆだねられていた。主題からややずれるが、文学における prototype の修正がすすんだ点で補助的に概観してみよう。この原型は神学的なそれと対蹠的に、悪魔的（diabolical）なもので、Chaucer 以来 Dickens にいたるまで好んで小説家の取りあげた stereotype であった。要するにキリスト教的諸価値に対置される“悪人像”で、伝説や宗教儀礼にまつわる偏見に基づき、Jewish reality とは

遊離したものだった。E. Rosenberg は *From Shylock to Svengali* でこの image を総括してみせ、N. Hawthorne も Emerson のようにローマのゲットーの実状に胸をいため、あるいは実際のユダヤ移民に出会って金銭に関するユダヤ人観をかえたともいわれる。M. Twain は *Concerning the Jew* (1899) という雑誌への論文で自らの偏見を否定し、宗教よりもその優秀さゆえのユダヤ人の迫害を例証し、彼らの連帯を説いた。また L. Hearn も一度は反ユダヤ主義になったものの、結局従来の stereotype は現実世界にはなく old ghetto の崩壊とともになくなったとした。さらに、正直で人の信頼には誠実、弱者にたいしてはいたわりの心をもつユダヤ人主人公を登場させた G.H. Jessup の *Sam'l of Posen; or the Commercial Prummer* なる劇は、ユダヤ人にたいする初期の caricature から後のより現実的なユダヤ人像への移行をよく示したものとされている。そのほか、H. James はユダヤ人の活力と知能に注目し、M. Kelly のように、東欧系移民の背景においてその子供たちの思考、感情、行動上の変化をとらえ、移民の生活にかなり密着した作品を書く場合も出てきた。このように Jewish reality がアメリカ文学に入ってきたにもかかわらず、一方では依然としてカビの生えた stereotype をもち出す作家もいた。たとえば、F. Norris はその *McTeague* でポーランド系ユダヤ人の貪欲さを述べ、J.R. Lowell はユダヤ人の才能をほめながらその影響力を過大視し、政府、社会を牛耳るものと恐れ、ユダヤ人支配の強迫観念につかれたような例もみられた。ともかく、非ユダヤ人からみたユダヤ人像は好悪の両極にゆれていたが、次の文学的事件にみてとれるように、stereotype の修正の趨勢は否定すべくもなかった。それは当時名声のあった W.D. Howells の長編 *The Rise of Silas Lapham* (1884) の一部修正のことである。最初雑誌に載せた時、主人公と妻とが近所にユダヤ人が住みつくようになったため不動産の評価が下落するのを云々した場面があり、これにたいして「The American Hebrew」の編集者の C.L. Sulzberger その他のユダヤ人から注意の手紙が出され、結局 Howells は本として出版の際、不本意ながらもこの箇所を削除したというものである。

最後に英国系の非ユダヤ人作家だが、処女作にユダヤ系音楽家の物語を Sidney Luska という変名で書いたため、読者にユダヤ系作家と思われた Henry Harland の特異なケースにふれるが、彼は世俗的宗教「倫理文化協会」(ユダヤ教とキリスト教をつきまぜ、両教徒をひとつの共通の倫理で結合しようというもの) の創始者 Felix Adler の影響を受け、新しい移民より同化過程にあるドイツ系ユダヤ人に興味をもっていた。第二作の *Mrs. Peixada* (1886) で、清純なユダヤ人の女主人公が醜悪な老人で金持ちのユダヤ人質屋との結婚を免れ、英国系アメリカ人の法律家との inter-

marriage で幸せになる話を書いた。これはユダヤ人読者にも比較的好評をもって迎えられたため、同じ intermarriage をテーマとした *The Yoke of the Torah* (1887) を出した。ユダヤ系芸術家の主人公がトーラの掟とキリスト教徒の娘への愛の板挟みになり、結局、伝統固守のラビの叔父や intermarriage のタブーに負け、ユダヤ娘と結婚した彼はそれを悔いて悶死するというものだった。これにたいしては作者の予期に反して、ユダヤ人側からユダヤ系人物を不当に悪く描いたこと、トーラを狭量なものとした点をつかれ、微妙なユダヤ人の問題に立ち入るなと警告されることになった。Judaism と human value の相克を描いて、ある意味ではその後のユダヤ的テーマを先取りしたものともいえるが、人物描写などに深みをもたせられず、非ユダヤ系の限界が露呈した結果であろう。Harland は悪意からでないことを弁明し、その償いとして *My Uncle Florimond* (1888) を書いたが、逆にあまりにもきれいごと過ぎるドイツ系ユダヤ人をつくり出し黙殺されてしまった。彼はこれを最後に他の活動分野をみつけ、ヨーロッパへ渡っていった。

ii）ユダヤ系作家へ移る前に、これも本題と直接かかわりはないが、この時期のイディッシュ文学ないし文化活動に簡単ながらも触れておかねばならない。なぜならその遺産は現代のアメリカ・ユダヤ系文学のなかにもさまざまな形で、たとえば、物語の諸形式、ユーモアや諷刺、原型的人物像（*Shlemiel*; 愚者、*Shlimazl*; 不幸者のような）、言語リズムや語法、語彙などで Bellow, Malamud 等の作品に影響を与えているばかりでなく、Isaac B. Singer (1904～)[2] のように、そのイディッシュ語作品自体が次々に英訳され、アメリカ現代文学を一層豊かなものにしているからである。

イディッシュ文学の源流は、口伝の民衆文学や教訓冊子、旅行記、婦女子用の聖書物語などにあるとされるが[3]、いわゆる近代的文学作品としての成立はたかだか150年前のことであり、ヘブライ語のロマンティック小説の下地をうけて、イディッシュ語のリアリズム小説があらわれてくる。とくにハシディズムの大衆性、情緒性がイディッシュ語の効用を高め、それによる題材を提供したのに応じ、近代啓蒙精神の光の下でのユダヤ民族伝統再認識の気運を促したハスカラーのイディッシュ志向が結びついて、19世紀後半にいたりシュテトルの解体がまさに始まろうとしていた矢先 climax を迎えたのである。これは三人の古典的巨匠たちに代表されるが、いずれもヘブライ語からイディッシュ語へ転じた作家で、諷刺とその背後にある愛とをもってユダヤ共同体の潜在的な感性を再現した Mendele (1836～1917)、同じく民衆への愛を基盤に無力な彼らをユーモラスに描きながらその尊厳を擁護したユダヤ版 M. Twain といわれる Sholom Aleichem (1859～1916)、大都会のユダヤ人の姿を通じて19世紀をシ

ュテトルにもたらしたI.L. Peretz (1851～1915) であった。イディッシュ語は流動的で、厳格な規則のない民俗語のため、創作上の制約もあったが、反面、軽快で味が利き、文学的可能性において自由なので抒情的表現や諷刺に適し、感情移入にはうってつけとされている。その意味で、これらの作家は文字通り彼ら自身の才能によって一つの民族文学を生み出したといえるのだ。その後三人のあとをうけて、題材も大都会のユダヤ生活や西欧文学にひろがり、技法も近代西欧文学のそれを取り入れるなどしていった。やがてシュテトルが消滅し、ドイツの強制収容所でイディッシュ語を話すユダヤ人が死んでも、イディッシュ文学はその普遍的世界と人物の創造によって、一つの文学的成果として現在に生き続けている。

ロシア帝国の崩壊でイディッシュ文学は三つの大きなセクション（ポーランド、ロシア、アメリカ）に分れるが（一部はイスラエル）、移民とともにアメリカに渡ったものは、その後も活動を続け、現在ではニューヨークが国際的中心地となっている。移民当初は慣れない英語に代って文学、文化活動もいきおいイディッシュ語でおこなわれたが、20世紀を迎えるまでの初期は、町工場などの被搾取労働者を対象にした社会意識の昂揚をうたった教訓詩が多く、これは作者たち自身社会主義者や無政府主義者で、またすでに東欧においてユダヤ系労働運動とイディッシュ文学とのつながりもあったからだと思われる。だが、主題、環境の重みに負け、文学的水準に達したものは少ないとされている。一方20世紀が明け、以後第一次大戦までにやってきた者に、ユダヤ文化伝統に拠る傾向強く、旧地の事象を再創造し、ロアー・イースト・サイドはたちまちイディッシュ文化の中心となり、文学活動、大衆社会運動、教育の隆盛をみるにいたった。イディッシュ語新聞の「Forward」(1897年創刊) も発行部数が1916年には約53万部にのぼり、その他 Yiddish theater も盛況だった。ヨーロッパの Yiddish writing の事情にも詳しいこれらの移民は、シュテトルとニューヨークのアパートの間の十字路に立ち、両者の要素を取り入れることになった。才能ある作家たちは「*Die Yunge*」(若者) というグループを結成し、象徴派や印象派の影響の下で、初期のイデオロギー的教訓詩に反対し美的文学を唱えた。だがイディッシュ文化にそなわる性格から、アバン・ギャルドやモダニズムを受け入れるには限界があり、後にそれぞれ伝統的 Jewish theme に立ち帰った。さらに内観派の詩人群もあらわれ自由詩を用い、cosmopolitan theme を好んで取りあげた。30年代になるとアメリカ文学と同じくプロレタリア文学への傾斜が深まった。その後も今日にいたるまで詩、散文とも創作はおこなわれているが、一つの大きい問題点として、アメリカにおいては世代の交代、ヘブライ語を重視するイスラエルでは政策上、イディッシュ語人口は

減少しつつある。経済的障害などなくなった代り読者もなくなるというジレンマに落ち入っているわけである。もう一つあげれば、英訳にあたってイディッシュ語の微妙なニュアンスを移しにくいという事情もあるといわれている。

iii) アメリカ社会でのその熱心な自己訓練によって、ようやく移民たちはイディッシュ語による旺盛な自己表現を英語を通してもおこなう段階に達した。それはまず、自ら旧い信仰を脱け出してアメリカへの同化に奮闘した若い移民女性、Mary Antin (1882～1949) の再生宣言ともいうべき自伝 *The Promised Land* (1912) から始まる。大量移民の始まった年の生まれの彼女は、まさに移民の子の運命を担っていたというべきか、13歳でポーランドより家族とともにボストンに渡る。彼女はロシア帝政下の敵意に満ちた外部への緊張と、居住区の正統派中心の共同体による重圧についての回想のなかで、新天地アメリカの幻影を対置させる。すでに伝統との絆を断ち始めていた家族のもとで、精神的な出立は用意されていたが、モスクワからのユダヤ人追放を機にアメリカへの肉体的解放が成就する。あたかも E. Lazarus の女神の呼びかけに応ずるように (後に作者は彼女の妹の世話になる)、約束の地アメリカでは、"...the arch of heaven soared above every head and a million suns shone out for every star. The winds rushed in from outer space, roaring in my ears, America! America!"[4] の讃歌となる。アメリカは彼女の期待に応えた。彼女にとって、一切のユダヤ的なものを棄て去ることがアメリカへの統合であり、無料で自由な教育、無限の機会に恵まれたアメリカもまた一切の桎梏をもたなかった。彼女は自らのアメリカへの改宗を死と再生として述べる、"I was born, I have lived and I have been made over. Is it not time to write my life's story? I am just as much out of the way as if I were dead for I am absolutely other than the person whose story I have to tell. Physical continuity with my earlier self is no disadvantage. I could speak in the third person and not feel that I was masquerading. I can analyze my subject, I can reveal everything; for *she* and not *I* is my real heroine. My life I have still to live; her life ended when mine began."[5] 大学卒業後ルター派牧師の息子で古生物学教授である人と結婚し、ニューヨークの郊外に居を定めた彼女は、若いアメリカのはかりしれない遺産を手中にしたことをもってこの輝かしい新生証明書を閉じるのである。

しかし、このような晴々しい門出にもかかわらず、彼女の後半生には苦く辛い人生の皮肉が待ち受けていた。理想の非ユダヤ系の夫たる教授は1920年妻と娘を残したまま中国へ渡り、25年余も帰国しなかった。social worker として生活を支えながら、老弱に向かった彼女は宗教への回帰を深めていったというが、伝統の復活があったの

か、あったとしてもどのようなものだったのか定かではない。ただ同じニューヨークのロアー・イースト・サイドの窮状が目に触れなかったとはいえないその後の彼女にとって、“Promised Land” が果たしていつまでも Eden の園であり得ただろうか？（後年ナチによって同胞意識を衝発されるが、彼女はこの自伝のなかの証言をひるがえさなかったという。アメリカで仕事に失敗し続けながらも子供たちに夢を托した若い父親と、自らの青春の記念碑として打ちこわす気にはなれなかったのであろう。）

Antin の場合、作者自身が向上と失意の浮沈を身をもって体験したわけだったが、主人公として世俗的に成功するユダヤ移民を取りあげ、その心奥の敗残を描いてみせたのが、この期の問題作であり、ユダヤ系文学にとってはじめての本格的な小説ともなった Abraham Cahan (1860〜1951) の *The Rise of David Levinsky* (1917) である。この作品は1913年にロアー・イースト・サイドの生活について書いた四つの話をもとにしているが、露領リトアニアの小さな町にヘブライ語の教師の息子として生まれ、伝統的なヘブライ語学校へ通った作者が1882年移民の波の始まりとともに渡米してきたように、主人公の David も、典型的なシュテトルの Antomir でのタルムードの勉強を棄てて、1885年移民の決意を固める。それは非ユダヤ人に母を殺されたあと寄食した開放的な家庭での見聞や、背教者となった友人の意見に次第に影響されていたところへ、ポグロムの発生とアメリカの魅惑が重なったためであった。アメリカへいくのは非ユダヤ人になることだと、驚き戒めるラビを押し切って、恋人にもらった金で渡航した彼は、ラビの予言の通り、最初はほおの巻毛、次はあごひげとともに戒律も剃りすてて、たちまち背教者への道を辿ることになるが、それは新世界への適応の道であったのだ。移民の窮乏生活の現実に直面して、彼もまたポケットに４セントしか持たず行商から始めねばならなかった。服飾品の籠売りから手押し車による衣料行商へ、さらに被服の製造業をおぼえて、ついに David は200万ドル以上の産をかかえる全国でも有数の業者にのしあがっていく。当時の世代の多くの者たちのように、彼もまた自由思想家 (freethinker) となり、その倫理的支柱は Social Darwinism であった。この Americanization と逆比例して、彼をユダヤ的生活につなぎとめていた糸は次々と切れ、いまや色欲の渦に沈んでいくことになる。しかし、かつてのタルムード研究にたいする熱が知識欲となって残り、彼の新生活の “synagogue” として City College への入学を夢みる。卒業証書は彼にとって知的貴族階級の証しであり、道徳の免状に思えたのだ。が、それも事業進展のチャンスに押しやられ、彼は結局、学問的理想へ背を向けて金儲けの道へ転じてしまう。こうして主人公は経済的に成功したものの、代りに家庭を失い、愛を求めてのめまぐるしい女性関係のなかでもどれ

一つとして実ることなく終るのである。彼の心は凍りつき、孤独が彼を捉え、成功も空虚に思えてくる一方、回想のなかで貧困の深みにあった少年時代、陰うつな過去が、輝かしい現在にも増して尊く親しみをもって迫ってくる。最後に百万長者は、次の告白によっておのれの生涯と本性について深刻な疑いを投げかける、"At the height of my business success I feel that if I had my life to live over again I should never think of a business career. I don't seem to be able to get accustomed to my luxurious life....I can never forget the days of my misery. I cannot escape from my old self. My past and my present do not comport well. David, the poor lad swinging over a Talmud volume at the Preacher's Synagogue, seems to have more in common with my inner identity than David Levinsky, the well-known cloak-manufacturer."[6)]

D. Levinsky の忠誠は M. Antin の改宗と同じくアメリカに向けられていたが、後者と違い（前身にたいする彼女の断絶宣言と彼の異和感）彼はかなりの ambivalence をもって過去を想起している。ここにこの作品の主題もかかわってくるのだが、主人公についていえば、身をかむ悔恨と孤独が成功につきまとい、昔の窮迫と知的生活への郷愁が裕福だが空しい生活に押し入ってき、不健全な環境の安っぽい価値に幻惑され、棄て去った祖父たちのユダヤ的価値ゆえに悩むその姿に人間的な共感を呼び、小説として成功している点だろう。この同化と郷愁、成功と悔恨の物語は移民の第一世代の作家に典型的なものとされているが、要するにアメリカ文化におけるユダヤ的伝統の存立の問題であり、同化への抵抗に帰着するであろう。シュテトルは外圧による不安の海にかこまれていても、ともかく一個の伝統の島であり、彼らなりの 1,000 年にも及ぶ生き方があった。いまやアメリカという自由の海では、移民の生活はいやおうなく併呑の力を受け拡散せざるを得ない、その時伝統の鎖が強い抵抗となって彼らの足を引張る。ユダヤ伝統とアメリカの現実のはざまに立った移民のパラドキシカルな姿をはじめて取りあげたこの作品で、作者は主人公を郷愁に傾かせることによって、融合への道に否定的な態度を暗示しているようである。このようにある意味では極めて特殊なテーマを扱った作品ながら、成功につきまとう虚無を描いたことで、アメリカ文学にみられる一つのパターンにも通ずるであろう。

作者はこの大作に先立つ約 20 年前の 1896 年にその処女作 *Yekl: A Tale of the New York Ghetto* を、次いで短篇集 *The Imported Bridegroom and Other Stories of the New York Ghetto* (1898) を出し、W.D. Howells や H. Hapgood によって S. Crane に比肩され激賞されたが、一般にはほとんど読まれることなく忘れられた。Yekl の話では、妻子を呼び寄せるべく先に渡米したユダヤ人の主人公がアメリ

カかぶれし、あとからきた妻とも別れて、つきあっていたアメリカの自堕落女と結婚する羽目になるが、彼はロシアでの過去が忘れられず、アメリカの現実と融和することもできない。短篇においてもこのような人種的identityの危機を描いたものが多い。

Cahanの諸作品は、その代表作も含め、全体として同化の進む過程にあって忘れられ、死後ユダヤ文学の上昇を迎える1960年代に入って再評価されるようになったが、彼自身は、ユダヤ社会主義運動の指導者の一人として当時重要な役割を果たした。前に触れたイディッシュ語新聞「Jewish Daily Forward」の創刊にたずさわり、その編集者となって若い移民作家の発掘や、イディッシュ文学の発展につくしたり、労働運動の興隆に力をかし、"Muckraking"の時代にはジャーナリストとして活躍した（この点 *The Rise of David Levinsky* も社会的自然主義小説の系譜に入り、被服業界の内幕をあばくという面がある）。彼は渡米前にすでに社会主義に興味をもち、革命団体へ加入しており、結局官憲の追及を逃れてアメリカにきたものであって、文学も当時のロシア文学（とくにトルストイやチエホフ）の影響を受けてリアリズム文学を書くようになっていた。彼は移民の大波がアメリカに一つの衝撃を与えていた時期に、その中心ともいうべきロアー・イースト・サイドの社会・文化生活を反映した人物であった。

Cahanも関心を示したように、移民当初の劣悪な条件下では、当然のことながら経済的向上を求めての闘争が頻発し（sweatshopといわれる零細搾取工場が有名で、ニューヨークではとくに被服の町工場が多かった）、これに取材して世論に訴える作品も出始めた。Florence Converseの *The Children of Light* (1912)、Arther Bullardの *Comrade Yetta* (1913)、すでにドイツ系ユダヤ人医師を主人公に東欧系移民の背景を描いた James Oppenheim の *The Nine-Tenths* (1911) などがそれであり、シカゴ生まれの Isaac Kahn Friedman は、より広く鉄鋼労働者の惨状を *By Bread Alone* で描いてみせた。このような社会主義ないし労働運動を扱う傾向は、ユダヤ民族意識にたいするアンチ・テーゼの問題もからんで後年（とくに30年代）に引き継がれていく。

専ら移民の第一世代のアメリカでの経験とその挫折、あるいは異和感をテーマとし、A. Cahanのあとを受けて、さらに20年代、30年代への橋渡しをつとめた女流作家に Anzia Yezierska がいる。彼女自身世紀の替り目に16歳でロシアから渡ってきた一世の移民で、その自由アメリカへの憧れにおいて M. Antin と通ずるものがあったが、ニューヨークで彼女を待ちかまえていた貧困との苦闘はあまりにも対照的であった。これまた Antin の父親と正反対に古習を守る父からいったん離反し、才能を

認められてハリウッドのシナリオライターとして迎えられたが、そこのあまりにも人工的な空気になじめず早々にニューヨークの陋巷に立ち戻り、晩年は、貧窮のなかにも世俗の価値に捉われずおのれの道を生きた父の姿に真の存在価値を見い出したのである。1915年に処女作の短篇を出し、続いて短篇集 *Hungry Hearts* (1920) により文才を買われハリウッドのシンデレラとなったわけだが、その大部分がアメリカへの移民の適応を扱い、しかもそのアメリカは、赤貧のなかにあっても彼女にとってはなお "Promised Land" であった。迫害の民の目に映った黄金の国アメリカへの希求はあまりにも強く、その苦い現実にもかかわらず、精神的理想主義、社会主義の土地としてより美しい美、より高い生活を創造せねばならない。そのためには飢にさいなまれた移民ではなく、心身とも豊かな彼らとなるよう機会を与えよ。作中の女主人公はたえず魂の飢につきまとわれ、愛を求めては "fairyland" ならぬアメリカに裏切られる。愛なきアメリカにきて想いは昔の村へ向かい、彼女の希求は、より高い生活を求めてきた彼女の民族の何世代にもわたるそれだと感じるのである。この挫折あるいは異和感は、*The Fat of the Land* で形をかえ、旧来の生活を願う母親と彼女をアメリカ風にしたいと望む成功した子供たちの間の確執という、ユダヤ系文学後年の世代間の争いのテーマに結びついていく。自伝 *Red Ribbon on a White Horse* (1950) によれば、ともかく作者としては、その理想主義的希求のなかでユダヤ的伝統の再認識にいたり、ようやく安心立命の境地に入ったと思われる。

同じアメリカの現実のなかでも、A. Yezierska のように挫折感をもたず、いいかえれば、はじめから彼女の悟達した世界で、同族とのスラムの生活や、旧世界での少年時代のよろこびを、イディッシュ語の感覚でうたったリトアニアからの移民詩人に Alter Brody がおり、彼は *A Family Album* (1918) その他によって、粗野で無慈悲な新しい現実に、一つの美を導入したといわれている。

最後に、やはり前二者同様 "New York Ghetto" で育ちながら、やや異なった視点（みようによっては正反対の立場）から、移民二世の1880年より1914年にかけての成長過程を描いたのが Samuel B. Ornitz である。語り手の自伝体をとった *Haunch Paunch and Jowl* (1923) で、アメリカの公立学校と移民社会の *cheder* (Hebrew school) との対比から新・旧二世代間の反目を浮き彫りにし、悪徳の professional Jew へのしあがっていく主人公の姿を通して、その醜く不遜な、いわゆる *allrightniks*（ユダヤ移民の成金）の Americanization を批判する。旧弊を墨守する世代ともども、このような自己中心的ユダヤ人像が、かえって再び黄色いバッジや周囲からの不信、嫌悪、迫害を招くのだから、一切のユダヤ的痕跡を拭わねばならず、そのための手っ

取り早い方策は intermarriage だとすすめる。Levinsky のようにこの主人公も恋人だったユダヤ娘への思慕を断ち切れないのだが、全体として、熾烈な生存競争を見据える作者は、アメリカで移りゆくユダヤ人社会をきわめて現実的にとらえているようだ。

以上この期のユダヤ人像をそれぞれの作家の場合を通してみてきたわけだが、総体的には、なんといっても大量移民によるユダヤ伝統社会とアメリカの出合いから生じた衝撃がより直接的に働いた時代であった。流されまいとする伝統の求心力と、それを振り切ってとび出そうとする同化の遠心力に大きく引きまわされ、その像は時として感情むき出しの表情をとる。憧れ、昂揚、歓喜、不安、逡巡、不満、焦燥、傷心、虚しさ、悔恨、郷愁、安らぎ……これらさまざまなものにまつわる感情エネルギーが、作家の想像力と結びついて登場人物を染めあげているのだ。自然主義的手法にもよるが、葛藤はあっても感傷におおわれ単調さは免れない。しかし、次第に第二世代の成長に伴い、個人の内部のみでなく、世代間の対立も取りあげられ、ユダヤ意識の強い抵抗をかかえながらアメリカ化が進行する様子がみてとれる。これからは "Melting Pot" にとび込んだ衝撃にかわって、その内部（アメリカ社会機構）でのぶつかり合い、さらには大不況や反ユダヤ主義の歴史的焔によって Judaism もいろいろと変容し、ユダヤ系文学におけるユダヤ人像の輪郭をますます複雑なものにしていくのである。その出発点としてこの期の移民そのものが、文学的テーマを背負った一つの大きい出来事であったといえるであろう。Yezierska の主張になぞらえれば、その後のユダヤ系文学への栄養添加により、アメリカ文学の創造の活性化がはかられることになるわけだ。

註 1) I. ドイッチャー：『非ユダヤ的ユダヤ人』(岩波新書、1970) p. 61.

2) 1978年度ノーベル文学賞を受賞したポーランド出身のユダヤ人作家。1935年アメリカへ亡命後も主としてシュテトルなど旧東欧のユダヤ人の世界を題材に数多くの作品を書き、近年ではアメリカを舞台にしたものもある。

3) *A Treasury of Yiddish Stories* ed. by I. Howe & E. Greenberg (The Viking Press, New York, 1968) Introduction. なお、この項は本書以外に前出の M. ディモント：『ユダヤ人』にもよった。

4) 原典 *The Promised Land* by M. Antin (Boston, 1912) p. 162.

5) Ibid., Introduction p. xi.

6) *The Rise of American Jewish Literature* ed. by C. Angoff & M. Levin (Simon and Schuster, New York, 1970) p. 68.

（いなだ　たけひこ　本学助教授・英語）